

テレビ局：TBS	番組名：報道特集	放送日：2020年5月16日
出演者：金平茂紀、日下部正樹、膳場貴子、宇内梨沙		
検証テーマ：オープニング 【特集】司法の独立は守られるのか		
<p>報道トピック一覧</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・緊急事態宣言解除後初の週末</li> <li>・オープニング</li> <li>・【速報】全国で新たに確認された感染者</li> <li>・宅配の「置き配」を狙う窃盗事件が相次ぐ</li> <li>・東京女子医大が投稿再開へ向けて学生全員に PCR 検査</li> <li>・ニューヨーク州の一部の地域と業種で経済活動が再開</li> <li>・高島屋の8店舗で食品以外の一部売り場が再開へ</li> <li>・アメリカの百貨店 JC ペニーが経営破綻</li> <li>・ベルリンで二ヶ月ぶりに飲食店再開</li> <li>・群馬県や茨城県で一部施設など再開</li> <li>・【速報】妻に暴行の疑いでボビーオロゴン容疑者を現行犯逮捕</li> <li>・【特集】緊急事態宣言～前倒しで39県解除</li> <li>・【特集】司法の独立は守られるのか</li> <li>・スポーツ報道</li> </ul>		
<p>放送法第4条の見地からの検討・検証および該当トピックの報道内容要旨</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・オープニング：結論→特に問題なし 金平キャスターが「緊急事態宣言が一部で解除された今週、検察庁法改正案に対して、ネット上でおびたしい数の人々が反対の声を上げました。その中のひとり、女優歌手の小泉今日子さんのもとにも中傷や嫌がらせが来たということです。人が発信する自由を脅かす行為はウィルス同様、またはそれ以上に怖い行為だと申し上げておきます。」とコメントしていた。 このシーンに当てられた時間は25秒で放送法上は特に問題は見られなかった。</li> <li>・【特集】司法の独立は守られるのか：結論→特に問題なし 膳場キャスターの「さあ、続いては、内閣の判断で検察幹部の定年を延長できるようにする、検察庁法改正案です。」とのコメント、金平キャスターの「改正反対の動きが、Twitter で大きく広がり、元検察トップらも反対の声を上げるなど、異例の展開を見せています。問題の根源はどこにあるのでしょうか？」とのコメントを受けて以下に朱記したようなVTRが取り上げられた。 金平（報告）「強い日差しが照りつけている国会前ですけれども、内閣の判断で、検察庁幹部の定年を延長できるという検察庁法改正案の審議が今日、国会の内閣委員会で行われます。」 デモ隊「検察庁法改正反対 強行採決絶対反対」 ナレ「国会前で反対の声上がる中、」</li> </ul>		

金平「森まさこ法務大臣がですね、内閣委員会での答弁のために入室するところですね。」

ナレ「これまで与党が拒否してきた森法務大臣の出席。昨日ようやく実現した。改正案では内閣が必要と認めた検察幹部について、定年を最大3年延長できるという特例規定が新設されている。」

ナレ「野党側は、政権の恣意的な人事が可能になるとして幹部の定年を延長する際の基準を示すよう求めたが・・・」  
森まさこ法相「現時点で人事院規則が定められていませんので、その内容を具体的に全て示すのは困難であります。」

ナレ「検察官の、定年延長をめぐっては、今年1月63歳の誕生日が目前だった黒川弘務東京高検検事長の定年を、半年延長する異例の閣議決定が行われた。今回の法案は、この決定を正当化する狙いがあるのではと、指摘されている。」

共産党 藤野保史衆院議員「この黒川氏の、件が、全ての始まりであると。そういうことなんじゃないですか？」  
森まさこ法相「時間がある中で、定年制度やこれに伴う諸制度と言うその近年の課題について、検察官への適用等を改めて検討したわけでございます。」

ナレ「野党4党は、新型コロナが大変な時に、どさくさに紛れて通そうとしているなどとして、法案を担当する武田大臣の不信任決議案を提出。採決は先送りされた。」

黒川検事長「えー東京高等検察庁検事長を拝命いたしました黒川弘務でございます。」

ナレ「安倍政権に近いとされる黒川氏とは、どんな人物なのか。黒川氏が事務次官を勤めていた当時の法務省と、鑑定の関係を示すメモがある。2018年5月に作成されたものだ。」

ナレ「入手したのは、共産党の辰巳孝太郎前議員。 当時は森友学園の土地取引を巡る公文書の改ざんについて、大阪地検特捜部による捜査が進められていた。財務省も省内の調査をしていて、その結果はいつ公表するのか、財務省と国交省とのやり取りが、記されているという。」

文書「5月23日の後、調査報告書をいつ出すかは、刑事処分いつになるかに依存している。官邸も早くということで、法務省に何度も巻を入れている。

刑事処分が、5月25日夜という話はなくなりそうで、翌週と思われる」

ナレ「総理官邸が法務省に、森友問題について、検察の捜査結果を早く出すよう要求していたとも読み取れる。」  
共産党辰巳孝太郎前議員「政府としては、2018年の通常国会の閉会。これが6月20日なんですね。当時で言うと。そこまでにケリをつけたいと。刑事処分を早く出してくれないと、国会閉会までに出してくれないとね、報告書なかなか出せない。ということで、官邸も早くということで、法務省に何度も巻きを入れていると。」

金平「早く刑事処分の結果を出せと。急げと。不起訴ですよ。全員不起訴。出せってようなことを、早くしろという時の、誰に言うかという時の、責任者というのは、法務省の場合誰になるんですか？」

辰巳氏「法務省で言うと、やはり官邸に近い、事務次官の黒川さん。諸々の形ということ ですよ。」

ナレ「メモの通り、5月25日の翌週、31日に大阪地検は、森友問題に関するすべての告発容疑を、不起訴処分 に。その4日後、財務省の調査報告書が、公表された。」

辰巳氏「この文脈で分かるのが、常に鑑定は不起訴になるということがもうほぼわかっていたと。独立性の求められる検察に対して、直接ではないにしろ、法務省を通じて、巻を入れていると。こういう官邸の姿勢っていうのが、浮き上がってくるかなと思うんですね。」

ナレ「今回の検察庁法改正案について、報道特集にコメントを寄せてくれた人物がいる。森友問題に関する公文書の改ざんを強要され、自殺した近畿財務局職員赤木俊夫さんの妻、雅子さんだ。」

手紙「安倍首相が法改正してまで、自分や自分の仲間を守ろうとしているなら、夫の再調査なんて期待できません。財務局の人は『世間の常識』よりもっと狭い『財務局の常識』の中だけで生きています。夫は自分

でものを考え、財務局の常識を疑い、として罪悪感の中、死を選ぶことになりました。夫のやったことは明らかにして、同じ苦しみの中にいる人が、希望が持てるようになればいいなあと思います。安倍首相には、改ざんさせられる側の人間の気持ちは、絶対に分らないと思います。」

ナレ「この法案をめぐるっては、ツイッターでもと呼ばれる新たな動きが注目されている。ハッシュタグ検察庁法改正案に抗議します との声が、数百万件、拡散した。中には、俳優、作詞家、映画監督、漫画家など、著名人も多く含まれる。」

水野良樹（いきものがかり）ツイッター「どのような政党を支持するのか。どのような政策に賛同するのかという以前の問題で、根本のルールを揺るがしかねないアクションだと感じています。」

ナレ「こうした声に政府与党の反応は。」

安倍総理「インターネット上の様々なご意見に対し、政府としてコメントすることは、差し控えます。」

自民党 森山 裕国対委員長「多くの国民の皆さんが、関心を持っていただいているということは、よくわかりますけれども、600万円だったのかどうかというのは、私は知る由がありません。」

ナレ「爆発的に広まった投稿の実態は、どういうものだったのか。ツイートの分析に詳しい、東京大学の、鳥海不二夫准教授は、先週金曜から、今週月曜午後3時まで、投稿されたおよそ470万件について、独自に分析を行った。」

東京大学大学院（計算社会学）鳥海不二夫准教授「多くは、人手で書かれていたのかと言う気がします。ただし拡散に関しては、一部の人が非常に多く、拡散させていたなということが分かっています。」

ナレ「470万件のうち、200万件以上は、およそ1万のアカウントによるリツイートだと分かった。ツイートだけに限ると、およそ56万件だった。」

鳥海教授「拡散した人も合わせると、百万規模のリツイートはだいたいなされていたと捉えて良いと思いますので、かなり大規模に広まったなという印象はあります。十分多多数の方が、このハッシュタグに対して、ポジティブな反応を示していると言って良いと思います。」

ナレ「また、今回の投稿については、ある特徴も。これは鳥海准教授が開発に関わったツイートの分析プログラムだ。この青い丸の一つ一つが、リツイートされた回数が多かった上位200件のツイート。内容ごとに分類すると、ほとんどが法案に抗議するもので、他は抗議する人たちに、批判的なツイートなどだった。」

鳥海准教授「正直、初めて見たなという感じです。大体はまあ反対派と言いますか、カウンターパートの方々もある程度ツイートされて、拡散されるというのが一般的。一つの要因としては、この拡散の速度が非常に早かったというのがあると思うんですね。つまりカウンターパート側が、何か材料を持ってくる間もなく拡散が行われてしまったと、いうのがかなり大きな要因じゃないかなと思ってます。」

ナレ「今週後半には、派生するハッシュタグも作られ、抗議の声は増え続けている。」

作家村山由佳さんのツイート「検察庁のOBと弁護士会が、両方揃って反対する法案って。しかもそれは今この時に、強行採決しないとしない理由は何なの？」

女優小泉今日子さん「私、さらに勉強してみました。読んで、見て、考えた。その上で今日も眩かすにはいられない。」

ナレ「小泉今日子さんは、今回ツイートした理由について、報道特集に対し、こんなメッセージを寄せた。」

小泉今日子メッセージ「政治について発言したのは、選挙には行くけれど、政治に対して無関心と言う私たちが作ってしまった現実を突きつけられたような気がしたからです。ずっと違和感や不信感を抱いていたけれど、その問題を後回しにしていた。そういう大人がきっとたくさんいて、ハッシュタグのツイートにつながり、若い人たちにも広がったと思っています。そして、それぞれの心の中で、自分達はこの国で生きているのだ！というこ

とを改めて考えるきっかけにはなかったのではないかと思います。」

膳場「よろしくお願ひします。」

ナレ「おととい膳場キャスターが、取材したのは、検察庁法改正案について取り上げていた慶応大学のゼミだ。オンラインの議論で、学生は Twitter の動きについて、の動きについて、強い関心を示した。」

大学一年の男性「友達とかでも全然、政治に興味なくて、全然話さなかったことでも、『あー何この法案』みたいな感じで、目につくようになった。」

大学2年女性「具体的に、直接世論というものを形成するあるいは表明することができるのがツイッターっていう意味なのかな。で、その、インターネットの政治参加という点では、今後、メインストリームになっていくと言うか、」

大学4年男性「今の既存の政党が、そういう今、Twitterを通して、その政治に関心を持ち始めた人たちに、どういう風に関わっていくのかなって個人的には、気になっています。」

ナレ「今回の法案審議では、Twitterの世論が、与野党の対応に影響を与えている面もある。その危うさを指摘する学生もいた。」

大学3年「ツイッターを使ってたので思うんですけど、だんだん、なんか、過激な議論とかに影響を受けて、感覚が麻痺してくることがあるんですね。そうすると冷静な判断とか、合理的な意思決定とかがだんだんできなくなってって、例えばデマが流れたりだったとか、今回も『抗議します』みたいのが来ると、やばいことが起こっている抗議しなきゃという風に思ってしまう。そういう風に煽られやすいというふうところがあるので。」

大学院生女性「Twitterとかが盛んになるのは、先ほどおっしゃってましたけど、政治に対して興味をもつきっかけになって、その、投票率とかそっちのほうの改善につながるんじゃないかなーというふうには個人的には思います。ただ、匿名で複数のアカウントを使っている方も、多いんじゃないかなって、思っていて、で、意見の偏りとかが見やすいのかなーっていうことも、ちょっと注意しなきゃいけないのかなって思います。」

ナレ「新型コロナウイルスの影響で、街頭デモや集会が制限される中、広がりを見せたツイッターデモ。ゼミを担当する清水裕一朗教授は、こう話す。」

膳場「Twitterをより使っている世帯だからこその、Twitter世論に対する理解度があるのかなという風に感じました。」

慶応技術大学 総合政策学部 清水唯一朗教授「実際かなり、その学生の声であるとか、そういうものが届くようになってきて、それが今政策競争を産むようになってきているのも、一面の事実かなと思います。従来よく聞かれていたのがその、『政治に関心のある人が少ない』と『政治とのコネクションがない』というところだったんですが、床が大きく変化しているということは、今日の議論からも、そういうことを感じている学生が多いんだろうなーということは、感じられたところですね。それはとても大きな変化なんだろうなと思います」

ナレ「この法案に異論を唱える法務大臣経験者がいる。江田五月元法務大臣。裁判官を経て政界入りし、法務大臣時代には、捜査当局の取り調べの、可視化に取り組んだ。現在は弁護士として活動している。新型コロナ対策で、先週からテーブルに仕切りを設置した。法務大臣を務めていた当時、黒川氏と一緒に、仕事をしていたこともあるという。」

金平「人柄的には、どうなんですか。」

江田元法相「かしこまりました。はいはい。ていうんじゃなくて、ちゃんと対等に当然対等に、議論もきっちりして、で、あの、じゃあこういう風にしましょうとか、色々こちらの思いも、ちゃんと分かってくれて、やる、そういう点では有能。」

ナレ「政府が法解釈を変更して行なった黒川検事長の定年延長。議事録も決裁書もない。」

江田元法相「これこそ前代未聞じゃないでしょうかね。聞いたことがないですね。内閣の勝手に、内閣だけで変えちゃうって話ですから。だからあの、国民が主人公ですよ、『いわゆる国民主権』これにね真っ正面から反することになってしまうわけですよ。」

ナレ「検察庁法改正案については」

江田元法相「検察というのは、まあ大変な権限を持って、行動するわけですよ。起訴すれば、したで、いやそれは不当な起訴だと。しなかったらしなかったらで、そんな無茶なことはないだろうといわれる。そういう中を進んで行くのが検察ですから、その時に一番大切なことは何かって言うと、『公正らしさ』『公平らしさ』多くの皆さんが、いや、『検察は正しいことをやっているんだ』と、信頼できるそのことが大切なんで、それには独立性が非常に大切。ところが 今度のこの法改正は、そのらしさというのを、根底から覆す。そういうものになっているという気がして仕方がないんですね。」

ナレ「現役検察官たちは、今何を思うのか。複数の検察幹部が、私たちの取材に応じた。」

検察幹部（ナレ）「黒川検事長の定年が、延長された経緯については、何の説明もなく理由は全くわからない。検察内部の大半で 共有されている認識だと思う。いくら安倍総理が『恣意的なことはない』と言っても、基準を示さないと、意味がない。」

ナレ「また、別の幹部は、検察幹部の定年延長そのものについて、こう疑問を呈した。」

検察幹部（ナレ）「幹部の判断が必要な場合に、特定の人でないと、絶対できないということは、ないと思う。長い検察の歴史の中、どのように運用してきたものが、なぜ今、定年延長が必要となるのか。」

ナレ「一方元検事総長ら、検察 OB が、昨日改正案に反対の意見書を法務省に提出した。極めて異例なことだ。意見書に名を連ねる一人、堀田力弁護士が、私たちの主題に応じた。堀田さんは東京地検特捜部時代、田中角栄元総理らを、逮捕したロッキード事件を担当している。」

ロッキード事件を担当 元検事 堀田 力弁護士「検察の、特に正解の疑惑を解明するという非常に大きな国民の皆さまがたに対する検察の責務・任務ですが、これが果たせなくなってしまう。そこがもう最大の問題だと思います。」

ナレ「問題の根底は、今年 1 月、黒川検事長が定年の延長を受け入れたことにあると指摘する。」

堀田氏「それはつまり、政治が検事に、その、役職延ばしてあげるといふ恩恵を与えた。恩恵を与えたことがあるってことは、それによって、政治の何らかのプラスがある、政治家に対する疑惑。モリカケ事件みたいな事件も含まれますけれど、ああいうような事件があった時に、検察はやらないようにするよと。それしかないですから。そういう国民の目から見たら偏った検察運営をする。そういう人は 役職定年延長という恩典を与えますよと。そういうメッセージになりますので、どんな状況だったか、あるにしろ、黒川さんとしては、いや私は、それはもう、断りますと、言うべきであるし、検事総長も、検察のトップとして、政治的な事件がやりにくくなるから、それは受けてはいけないということを、しっかり言うべきであった。」

ナレ「その上で堀田氏は、黒川検事長と、稲田検事総長は、責任を取るべきだという。」

堀田氏「辞職を勧めるなんてことは、本当はしたくない大変なことですから、ただ今回は、こういう仕組みとして通ってしまえば、今はもちろん将来に渡って非常に大きなマイナスを与える。検察だけでなく、もちろん国民全体のマイナスになる。不正なことが隠れてしまうことになりますので、責任取らなきゃいけない。」

VTR を受けてスタジオでは以下に朱記したようなやり取りが繰り返された。

膳場「金平さん取材しての実感はどうですか？」

金平「堀田さん出てましたけど、僕は実は、ロッキード事件の裁判を、実際に取材してですね、古狸ですけど、その堀田さんとはその頃からの、面識で、実際に法廷で、田中角栄元首相とですね、対峙する剃刀堀田と言われ

てましたけど、そのシーンを未だに憶えてる世代の人間なんで、当時の検察官が持ってた矜持とかね、公正さを求める倫理観の強さみたいなものってのは、いまだに思い出もあるかもしれませんが、残ってるんですね。時代が変わってもですね、検察が果たすべき役割ってのは、僕は変わらないっていう風に思ってるんですね。松尾邦弘その元検事総長が法務省に出した反対意見書ってあるんですが、これ皆さんね、実際お読みになった方がいいと思いますよ。これ 歴史的な文章になると思ってるんですけども、その堀田さんが改めておっしゃってたこと、ちょっと補えばですね、国民からの信頼ってのが自分たちの基礎にあるって事を、おっしゃってたって言うね。それはものすごい諫言。諫める言葉だと思って。そういう言葉ってなかなか聞けないんですよ。それからもう一つインターネット上の、盛り上がりですね、これいろんな意見があると思うんですけども、ご紹介した小泉今日子さんのメッセージはあれは何度かメールでやり取りしてた時に、の一部で、自分のところには励ましの声とかね、そういうものは来てるんだっていう風に、おっしゃってましたけれども、ただやっぱり、中傷とか、歌手の癖とか 俳優の癖にみたいな言いがかりってのは一体何なのかなと私は個人的に思いますけどね。」

膳場「今回あの、この法改正おかしいんじゃないかという声が、噴出しているのって、これ今まで、政権に対する様々な疑惑、モリカケですとか、桜を見る会、こういう物に納得できる答えを得られずにここまで来たことがくすぶっているのかなと感じましたね。多くの国民や専門家や、多方面の文化人の声に、耳を傾けるのが、健全なセーフだと思うんですけどもね。」

日下部「あの布マスク 2 枚、未だ配り終えていない政権にね、三権分立をですね揺るがしかねないような、重要な問題、これは扱余力ってあるんでしょうか？って僕疑問に思っちゃいますね。もし余力があるんでしたらね、ぜひ、今はさらに危機感を持ってですね、コロナ対策、これに全力投球してほしいと思います。」

この特集に当てられた時間は 1521 秒で、放送法上は特に問題は見られなかった。

最高裁判例の見地からの「印象操作」に関する所見および該当トピックの報道内容要旨

特に問題なし

検証者所感

・【特集】 司法の独立は守られるのか

個人的には、検察の独立が「司法の独立」と読み替えられていることに、非常に恐怖を覚えた。

検察が司法であるならば、刑事裁判というのは司法が起訴し、司法が裁くという自作自演のようなものになってしまうのではなからうか。

また、「検察の独立は守られるのか」という問いの立て方にも違和感を覚えた。これまで検察が政治に対して独立していたと言えるのだろうか。また、検察が政治に対して中立だったと言えるのだろうか。検察の歴史を少しでも見てみると、どうにもそうは思えない。

安倍政権による検察庁法改正が良いものとは思えないが、それに対するカウンターで検察の独立や中立を過度に持ち上げる風潮には違和感を覚える。現に日本の検察というのは検察ファクションであるとか検察庁内での激しい派閥抗争、政権と結託して特定の政治家を刺す、などということをやってきた前科があるわけだから、手放しで褒められるような組織でもないだろう。

金平キャスターは「僕は実は、ロッキード事件の裁判を、実際に取材してですね、古狸ですけど、その堀田さんとはその頃からの、面識で、実際に法廷で、田中角栄元首相とですね、対峙する刺刀堀田と言われてましたけど、そのシーンを未だに憶えてる世代の人間なんで、当時の検察官が持ってた矜持とかね、公正さを求める倫

理観の強さみたいなものってのは、いまだに思い出もあるかもしれませんが、残ってるんですね。」とコメントしていたが。そのロッキード事件にしても、その背後には田中角栄の政敵であった三木武夫首相による強力な後押しがあった、ということも明らかになっている。「当時の検察官が持ってた矜持とかね、公正さを求めるりり感の強さ」というのは金平キャスターの思い出補正と言ってしまうとそれまでであろうが、他方で結局、田中角栄は公判中に死去し有罪無罪が確定しておらず、近代法治国家であれば無罪推定の原則が働くはずなのに、刑事被告人として死ぬこととなり、刑事被告人である間に行われた報道などで傷つけられた名誉は回復されていない、という負の側面を忘れてはならないだろう。

ところで VTR 中では共産党の辰巳前議員が入手した文書が取り上げられていたが、共産党は一体どういうルートでそうした文書を入手しているのだろうか。また、そうした文書が共産党の手に渡るといのは一体役所はどのような文書管理をしているのだろうか。非常に気になるところである。